

「推こう」指導に関する研究

— 小学校5年生の推敲に関する意識調査からの一考察 —

東京学芸大学附属小金井小学校 成家雅史

目 次

1. 問題の所在と研究の目的	102
2. 研究の方法	103
2. 1 意識調査の方法	103
3. 意識調査の結果	104
3. 1 書くことが好きか	104
3. 2 書くことで最も大切な段階	104
3. 3 推敲の習慣性	105
3. 4 推敲の観点で大切なこと	105
3. 5 推敲で最も大切なこと	106
3. 6 推敲で最も大切なことに、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」が多かった理由	106
3. 7 ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」	107
4. 考察	108
4. 1 意識調査の結果から	108
4. 2 書くことが好きなことと推敲の意識の相関	108
5. 展望	109

「推こう」指導に関する研究

— 小学校5年生の推敲に関する意識調査からの一考察 —

東京学芸大学附属小金井小学校 成家雅史

1. 問題の所在と研究の目的

「書くこと」の指導事項には、推敲の学習過程がある。現在の推敲の指導事項では、次の事項を指導することになっている（文部科学省、小学校学習指導要領解説国語編「B書くことエ」；2017.6）。

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文の続き方を確かめたりすること。	間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えること。	文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えること。

この指導事項から読み取ることができる推敲の機能は、大きく3つになるだろう。1つが、文章を読み返す習慣をつけること、2つが、間違いを正すこと、3つが文や文章を整えることである。また、指導事項は、発達段階ごとに推敲によって文や文章のどこを見るのかということを示している。しかし、稿者は、推敲の機能は、これらの3つにとどまらなと考えている。また、発達段階に応じず、根本的に推敲で指導すべき事項があると考えている。このような考えから、推敲を「推こう」と表記し区別する。

稿者が考える「推こう」は、思考力や認識力を育てる推敲の在り方である。内田（1990）は、作文教育において、文章の推敲が何らかの意義をもつとしたら、推敲によって書き手の認識が変化したり、書く以前には自覚されなかったことが新たに発見されたりする場合だと述べている。さらに、書くことによって認識が深まるとしつつも、子供が書き終えた作文に教師が「こう直しなさい。」というように赤を入れて書き直しをさせていては、子供は文章を書いても認識が深まらないとも述べている¹。これらの内田の指摘は、教師の推敲指導に対する次の問題が含まれると考える。それは、子供自身が推敲して文章をよりよくしたり認識を深めたりするように教師が推敲指導しなければならないという問題である。

国語教育において、内田の指摘する推敲に関わる問題は、倉澤栄吉の「第3の推考の働き」という概念によって実践研究が行われていたこともあった²。倉澤（1965）は、自身が指導的立場にいた東京都青年国語研究会で、それまでの学習指導要領で使用されていた「推敲」が「推こう」ということばとしたことを機会に、「推考」と置き換えたことを評価して、当時「推考」という表現を用いていた。そして、「第3の推考の働き」というのは、第1は、「狭い意味の批正にあたり、ある法則に照らして誤りを正すこと」、第2は、「文や文脈の照応関係において、自分が表そうとする事柄と表現のズレ（ママ）を確かめること」という2つの推考の働きを包括する「高度な概念」として取り上げ、「作文を見る目が動く」ことだとしている³。「作文を見る目が動く」というのは、内田（1990）が述べている「書き手の認識が変化したり、書く以前には自覚されなかったことが新たに発見されたりする」ことと同じことだと捉えることができる。

本研究では、倉澤の「第3の推考の働き」のような「推こう」を目指して書くことの推敲指導の在り方を探るための一考察として、子供自身が推敲をどのように認識しているのかを検討することが目的である。

2. 研究の方法

2. 1 意識調査の方法

小学校5年生（実施時期：12月）を対象にして、書くこと及び推敲に関する意識調査を行う。調査項目は、次の通りである。

1. あなたは、書くことが好きですか。
 - ア. 大変好き
 - イ. まあまあ好き
 - ウ. あまり好きではない
 - エ. 全く好きではない
 6. 書くことの中で、最も大切だと思う段階はどの段階ですか。
 - ア. 書く前に書くことを考える・決める段階
 - イ. 書く前に書くことの中心や構成を考える段階
 - ウ. 書いている最中の段階
 - エ. 書き終わった後に文章を読み返す段階
 - オ. 書いた文章を誰かと読み合う段階
 - カ. その他
 7. 6の質問のエの段階について、よく行いますか。
 - ア. よく行う
 - イ. ときどき行う
 - ウ. あまり行わない
 - エ. 全く行わない
 8. 6の質問のエの段階で大切だと思うことはどれですか。（複数可）
 - ア. 読み返す習慣をつけること
 - イ. 誤字・脱字に気付き・直すこと
 - ウ. 文の組み立て（主語、述語、修飾語の順序やねじれ）を見直すこと
 - エ. 文と文、段落と段落のつながりや順序を見直すこと（構成）
 - オ. よりよい表現に気付いたり直したりすること
 - カ. 表現の効果を確かめたり工夫したりすること
 - キ. 書きたかったことが書けているかを見ること
 - ク. 書いたことでどんなことを考えたかを見ること
 9. 8の質問の中で、書き終わった後に文章を読み返す段階で、最も大切だと思うことはどれですか。
- ※2, 3, 4, 5に関しては、本研究とは直接的に関係しないので、省略する。

それぞれの項目を挙げた理由としては、次のように考えている。1「書くことが好きか」については、書くことが好きなことや嫌いなことと推敲の意識がどのように関係しているのかを検討するために、調査する。6「書くことで最も大切な段階」をどのように認識しているのかを聞いている。アからオについては、学習指導要領に示されている書くことの学習過程に準じている⁴。学習指導要領では、ア題材の設定・情報の収集・内容の検討、イ構成の検討、ウ考えの形成・記述、エ推敲、オ共有、（高学年は、ウ・エが考えの形成・記述、オが推敲、カが共有）となっている。7は推敲の段階についての習慣性である。8は、推敲の段階で子供自身が大切にしている観点は何かを明らかにしている。9は、子供自身が推敲で最も大切な観点を明らかにしている。また、書くことが好きなことや嫌いなことと思考力や認識力を育てるという「推こう」に向かう観点との関係についても明らかにしていきたい。

対象となる児童は、東京学芸大学附属小金井小学校5年児童102名である。5年生を選んだ理由としては、思考力や認識力を深めるといふ「推敲」の段階を意識していける発達段階ではないかという推測の下である。2017年度4月にクラス替えをして、取り立てて推敲指導をしていないという条件も研究の対象として適切であると判断した。

3. 意識調査の結果

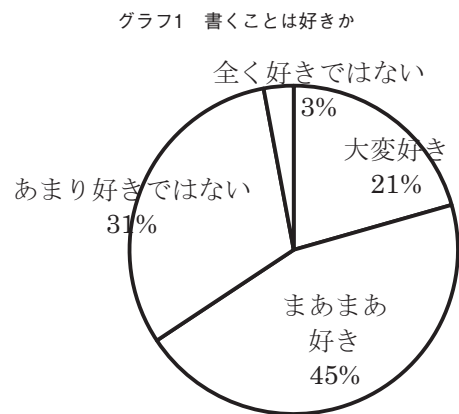
この意識調査での「書くこと」というものは、次のような種類を全部含めて「書くこと」としている。

- | |
|---|
| ・通信文（手紙） ・日記 ・物語文 ・観察文 ・説明文 ・感想文 ・紹介文 ・報告文 ・意見文
・随筆 ・詩 ・俳句と短歌 ・劇の台本・脚本 ・学習の振り返り（ミニレポート・学習感想） |
|---|

それぞれ、小学校の教科書に掲載されている文種、もしくは、児童の日常の言語生活の中にある「書くこと」を入れている。しかし、「随筆」については、5年生の段階で「書くこと」を指導している学級はなかったため、無記入でもよいことを加えて説明した。

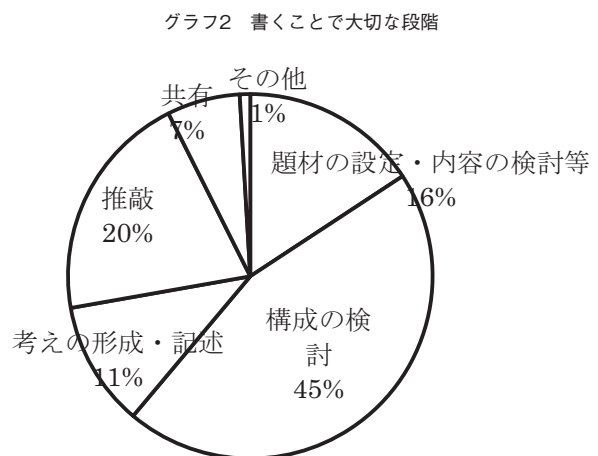
3. 1 書くことが好きか

グラフ1に示したように、書くことに関して、「大変好き」と答えた児童が21%、「まあまあ好き」と答えた児童が、45%であった。合わせると66%の児童が書くことを好意的に捉えている。一方で、「あまり好きではない」と答えた児童が、31%、「全く好きではない」と答えた児童が3%であった。合わせると、34%の児童は書くことに対しては消極的な態度であることがわかった。



3. 2 書くことで最も大切な段階

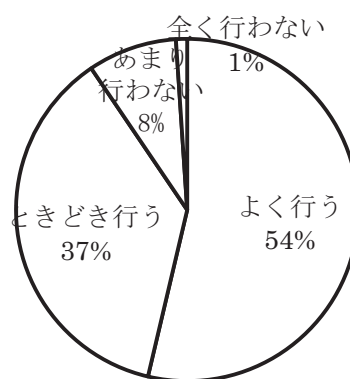
グラフ2に示したように、書くことで最も大切と思う段階に関して、「題材の設定・情報の収集・内容の検討」の段階と答えた児童は、16%であった。「構成の検討」は45%で、約半分に近い割合で最も多かった。「考えの形成・記述」は11%。「推敲」は20%であった。「共有」は7%、「その他」は、1%だけであった。「推敲」20%は、2番目に「最も大切だ」というように認識している児童が多いということを挙げられる。



3. 3 推敲の習慣性

グラフ3に示したように、推敲の習慣については、「よく行う」と答えた児童が54%で、過半数を上回った。さらに、「ときどき行う」と答えた児童が37%であった。この結果を合わせると、およそ9割強の児童が、自分が書いた文章を読み返す習慣は持っている。「文章を読み返す習慣」は、学習指導要領では、第1学年及び第2学年の最初の項目にあり、定していることは、「推敲」を目指す上でも有効な態度と捉えることができる。

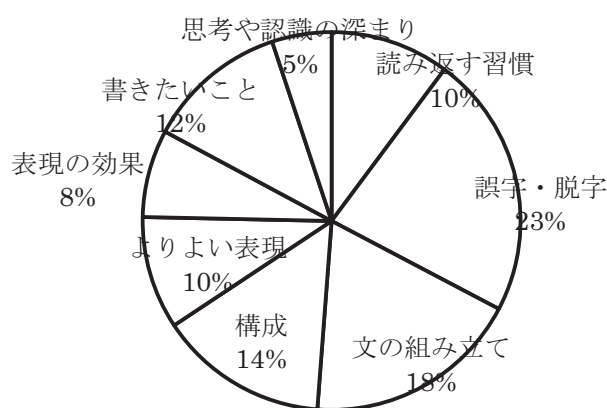
グラフ3 推敲の習慣



3. 4 推敲の観点で大切なこと

グラフ4で示したように、推敲の観点で大切なこととして、ア「読み返す習慣をつけること」、イ「誤字・脱字に気付き、正すこと」、ウ「文の組み立てを見直すこと」、エ「文と文、段落と段落のつながりや順序を見直すこと（構成）」、オ「よりよい表現に気付いたり直したりすること」、カ「表現の効果を確かめたり工夫したりすること」、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」、ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」の8項目から調査した。この項目は、複数回答を認めた。

グラフ4 推敲で大切なこと



理由としては、児童が推敲するという行為について、どのような作業を推敲することだと認識しているのかを分析するためには、複数の回答を認めたほうが実態を明らかにすることができると判断したからである。

結果を割合の多い順に整理すると次のようになる。

- | |
|--|
| 1位：イ「誤字・脱字に気付き、正すこと」(23%) |
| 2位：ウ「文の組み立てを見直すこと」(18%) |
| 3位：エ「文と文、段落と段落のつながりや順序を見直すこと（構成）」(14%) |
| 4位：キ「書きたかったことが書けているかを見ること」(12%) |
| 5位：オ「よりよい表現に気付いたり直したりすること」(10%) |
| 5位：ア「読み返す習慣をつけること」(10%) |
| 7位：カ「表現の効果を確かめたり工夫したりすること」(8%) |
| 8位：ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」(5%) |

質問の設定としては、アからキについては、学習指導要領にある推敲の指導事項となっている。発達段階で分けると、アとイが第1学年及び第2学年であり、ウとエが第3学年及び第4学年であり、オとカとキが第5学年及び第6学年である。発達段階別にみると、割合は次のように整理される。

- | |
|---------------------------|
| 第1学年及び第2学年に相応：アとイ (33%) |
| 第3学年及び第4学年に相応：ウとエ (32%) |
| 第5学年及び第6学年に相応：オとカとキ (30%) |

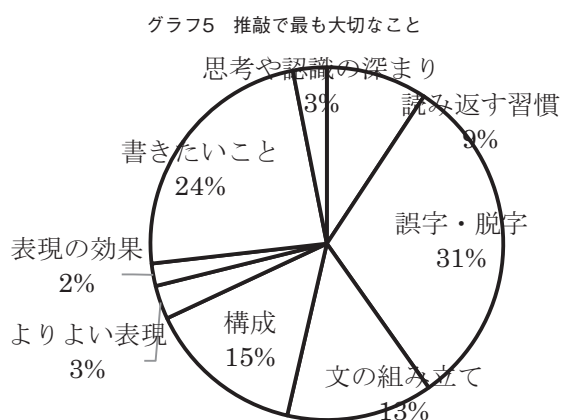
推敲の観点として大切なことを聞いているので、5年生であれば、オとカとキの割合が最も高いほうが発達段階としては相応すると考えられる。上位3位のイとウとエは批正的な意味がある。これら3項目合わせると55%になり、児童は、推敲という行為に批正的な意義があるものとして捉えていることが明らかになった。

3. 5 推敲で最も大切なこと

グラフ5では、「推敲で最も大切なこと」を先のグラフ4で示した8項目の中から一つだけ選択した。

予想としては、イ「誤字・脱字」やウ「文の組み立て」、エ「構成」が多くなると推測していた。結果としては、やはり、イ「誤字・脱字」が31%と最も大切なこととして捉えられていることが明らかになった。予想に反していたのが、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」であった。「推敲の観点で大切なこと」では、4位で12%だったのが、

本項目では2位で24%になっている。本項目だけは、選択した理由を記述したので、後の項目で、児童の意識を明らかにしていきたい。本項では、結果を多い順に整理する。



- | |
|--|
| 1位：イ「誤字・脱字に気付き，正すこと」(31%) |
| 2位：キ「書きたかったことが書けているかを見ること」(24%) |
| 3位：エ「文と文，段落と段落のつながりや順序を見直すこと（構成）」(14%) |
| 4位：ウ「文の組み立てを見直すこと」(13%) |
| 5位：ア「読み返す習慣をつけること」(9%) |
| 6位：オ「よりよい表現に気付いたり直したりすること」(3%) |
| 6位：ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」(3%) |
| 8位：カ「表現の効果を確かめたり工夫したりすること」(2%) |

3. 6 推敲で最も大切なことに、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」が多かった理由

推敲で最も大切なことに、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」が24%もの割合で選ばれたことは予想に反していた。そこで、理由について詳しく分析する。調査対象は、102名だったので、24%は人数に換算すると、23名である。一人一人の理由を取り上げると次のような結果となる。

番号	理由
1-①<注1>	自分が書いたことが伝わらないと，文を書く意味がないから。
1-②	書くのは，自分が何を伝えたいか，自分の気持ちも書くので，自分が書きたかったことを書くのが一番大切だと思いました。
1-③	自分が伝えたいことを書けていないと読み手が何を伝えたいかがわからないから。
1-④	自分の言いたい点（要旨）を読み手に伝わらなかったら，読み手も混乱し，楽しい文にならないから。
1-⑤	最後にパッと見直したときに，何を伝えたいのか読者に伝わらないから。
1-⑥	そもそも自分の意見が書けていないなら意味がないから。
1-⑦	自分の伝えたいことを書いたのに，伝わっていないと，書く意味がないから。

1-⑧	自分が一番伝えたかったことが書けていなかったら、相手に伝わらないから。
1-⑨	自分が読者に何かを伝えようとしているから、その伝えたいことが伝えられているかどうかだから。
1-⑩	自分の書きたいこと、その文で人に表したいことが、書けていないと文章が成り立たなくなってしまったりするから。そのように、自分の書きたかったことを入れると、もっとその文がよりよくなったり、おもしろくなったりするから。
2-①	自分の思うように書けていなかったら、あまりいい文などが作れないから。
2-②	文法などに気がいってしまい、自分が書きたかったことが書けないことがあるから。
2-③	文章は、自分の思ったこと、書きたいものを書くので、その気持ちを正直に書いているかが大事だから。
2-④	自分が何を伝えたいのかを考えて、それをしっかり文に伝えられたかが一番重要だと思ったから。
2-⑤	言いたいことを書いていないと、だらだら続いているだけの文章になってしまい、結果、つまらなくなってしまう、もったいないから。
2-⑥	書きたかったことが、(例)サッカーのことで、でも中に書かれてしまっていることは、少しサッカーでも、野球のことが書かれていたり、するとわけのわからなくなってしまうと思うから。
2-⑦	書きたかったことが書けていないと、自分の思いが相手に伝わらないと思うから。
3-①	書いていくうちに、書きたいものと別のものをかいてしまったら、文章がごちゃごちゃになるから。
3-②	やはり、書きたいことを書けていなければ、何も始まらないから。
3-③	自分の書きたいことを書けていないと、その文章を書いた意味がないし、気持ちがすっきりしないから。
3-④	何かを書くときは、自分の伝えたい(書きたい)ことがいかに書かれているかが大切だと思うから。
3-⑤	自分が思っていたこととは違うことが書かれていると、相手に自分の思いが伝わらないから。
3-⑥	やはり、表現や字の間違いより、本当に書いたことが相手に伝わっているか、伝わっていなければ意味がないと思うのでキがよいと思う。

<注1>1-①という表記は、1組の一人目という意味である。

上の表からは、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」を選択した児童は、相手意識が大変高いことがわかった(読み手:1-③, 1-④, 読者:1-⑤, 1-⑨, 相手:1-⑧, 2-⑦, 3-⑤, 3-⑥)。小学校5年生の現段階では、キを推敲で最も大切なこととして選択し、相手意識をもって理由を答えている児童は、大変、推敲の意識が高い児童と言える。だが、自分の書いた文章を「伝える」という思いのほうが強く、「見方や考え方が変わったり」、「認識が広がったり深まったり」という力が育つという「推こう」とは差異がある。

3. 7 ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」

ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」を選んだ児童は、3名いたが、理由を記述できたのは1名だけであった。その児童は以下のように理由を書いている。

○どんなことを考えたかを見ることによって、相手に「最も伝えたいこと」を明確にし、分かりやすい文章にすることが大事だと思ったから。

この理由にも相手意識が表れている。そのことは非常に重要なことであることは、キが選択された理由と同様である。注目したいのは下線部分(稿者による)である。「どんなことを考えたかを見る」と「最も伝えたいこと」が「明確」になるという認識を持っているのである。キの理由にも、「伝えたいこと」や「書きたいこと」が書かれていないと「伝わらない」という記述が散見されたが、「どんなことを考えたか」と自分に対して反省的思考を働かせているまでには至っていない。「推こう」は、反省的思考が働いてこそ、「見方や考え方が変わったり」、「認識が広がったり深まったり」という力が身に付いていくものとする。

4. 考察

4. 1 意識調査の結果から

本研究の意識調査では、推敲という表現を用いずに、推敲の段階を小学校5年生の児童がどのように意識して自分の文章を読み返しているかということ聞いた。調査の結果から明らかになったことは、主に3つある。

1つは、児童は書くことの中で、推敲の段階を2番目に大切だと認識しているということである（グラフ2）。書くことの行為を、書く前、書いている最中、書いた後というように分類すると次のようになる。

グラフ6に示したように、書くことで最も大切に思う段階に関して、「題材の設定・情報の収集・内容の検討」や「構成の検討」という書く前の段階と答えた児童は、61%であった。「考えの形成・記述」という書いている最中の段階と答えた児童は、11%と、1割にとどまった。「推敲」や「共有」の書いた後の段階と答えた児童は、27%であった。

この結果から、児童は書く前の段階を大変大切にしていることが明らかになった。この結果は、倉澤（1965）が50年前に実践研究の必要性を述べていた「第3の推考の働き」や推考を包括的な「高度な概念」として見るべきだと指摘していたことと重なる。つまり、書くことによって「考える」ということを大事にしようということである。それは、「取材の段階、構想の段階、記述の段階とすべての段階でありうる」のである⁵。児童の意識調査からは、書く前の段階、「取材の段階や構想の段階」で「考える」という行為が行われていることがわかる。それが、表現につながるかどうかということとはまた別の問題であろう。

2つは、上で述べたように「取材の段階や構想の段階」という書く前の段階で「考えた」ことが、表現されているかどうかを見ることが大切だ（キ「書きたかったことが書けているかを見ること」（24%））ということも、児童の意識の中に高くあることもわかった。これらの結果から、「こう書こうと思う。」「こういう文章が書きたい。」というようなことを形式や表現面とは異なった内面的「思考」に当たる部分をしっかりと意識させる段階が書くことには必要だということが改めて認識できた。その部分こそが、「推考」指導をどのようにしていくかの課題であると考ええる。

3つは、「誤字や脱字に気付き、正すこと」であったり、「文と文のつながりや順序などを見直すこと」であったりと批正的な意義を感じていることである。一方で、「よりよい表現に気付くこと」であったり、「表現の効果を工夫すること」であったりという表現への意識は低かった。この結果に対しては、これまでの学習経験の影響であるのか、「間違い」に対する抵抗感であるのかは、本研究では明らかになっていないので、研究の課題として今後取り組んでいきたい。

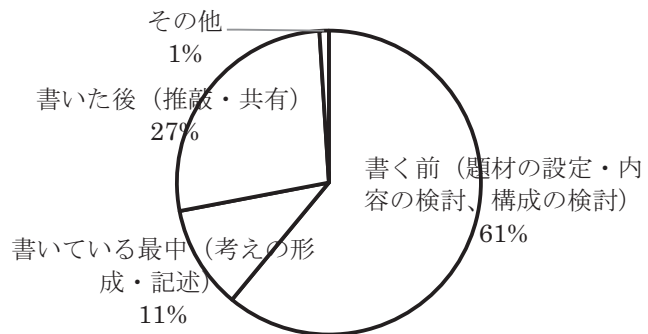
4. 2 書くことが好きなことと推敲の意識の相関

次に、書くことが好きや嫌いとは推敲の意識とは、どのような相関関係にあるのかを検討する。

グラフ7とグラフ8には、書くことが「好き」な場合と、書くことが「好きでない」場合の推敲の段階で最も大切なことの意識の結果を示した。

グラフ7の書くことが「好き」な場合は、イ「誤字・脱字に気付き、正すこと」・ウ「文の組み立てを見直すこと」・エ「文と文、段落と段落のつながりや順序を見直すこと（構成）」という批正的な意味合いが強いものの

グラフ6 書くことで大切な段階



割合を合わせると56%である。

一方で、内容面に関するキ「書きたかったことが書けているかを見ること」・ク「書いたことでどんなことを考えたかを見ること」というものの割合は合わせて31%であった。次に、グラフ8の書くことが「好きでない」場合は、イ・ウ・エの割合が61%で、キ・ク17%であった。

この結果から考えられることは、批正的な意味合いを最も大切にしている割合は、「好き」でも「好きでない」でも、およそ6割程度である。しかし、内容面に関しての割合は、「好き」な場合は31%で、「好きでない」場合は、17%で、書くことを好意的に考えている方が、およそ2倍程度の割合である。つまり、書くことを否定的に考えている児童は、書いた文章を推敲することを批正的な意味で考えている傾向が好意的な児童よりもあり、内容面には意識が向かない傾向が強いということが言える。

さらに、グラフ9では、推敲の段階で最も大切なこととして、キ「書きたかったことが書けているかを見ること」を選択した児童の中の書くことが「好き」と「好きでない」場合を比較している。「好き」に分類される「大変好き」・「まあまあ好き」を合わせると79%である。およそ8割である。一方、「好きでない」に分類される「あまり好きでない」・「全く好きでない」を合わせると21%である。したがって、書くことを好意的に考えている児童のほうが、内容面を大切に考える傾向が高いと言える。

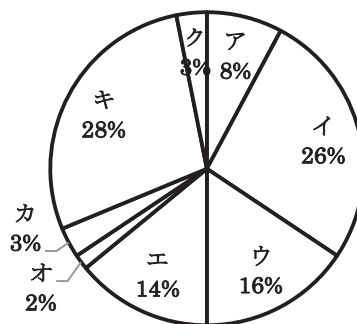
これまで、書くことが好きなことと推敲の意識の相関を見てきたことで明らかになったこと

は、書くことを好意的に考える児童のほうが、より内容面、つまり自分が書きたいことを書けているかということ意識して推敲しているということである。このことは、書くことに抵抗感を抱く児童への書くことの指導の在り方を検討することにもつながる課題であると推察する。

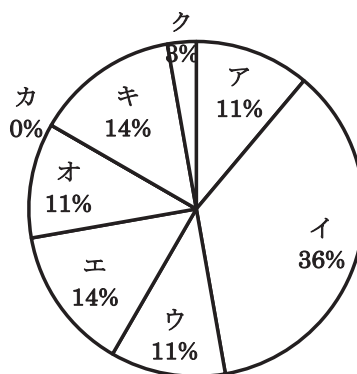
5. 展望

本研究において、小学校5年生の児童は、書くことの中で推敲するという行為を大切な行為であると認識している児童が2割程度いるということが明らかになった。この結果は、自分の書いた文章を「見る」という推敲の初歩的な営みを意識できている割合とも取ることができる。決して大きな割合は占めていないが、「作文を見る」姿勢というものは、特に推敲指導を重点に置いて書くことの指導がなされなくても児童に養われているというこ

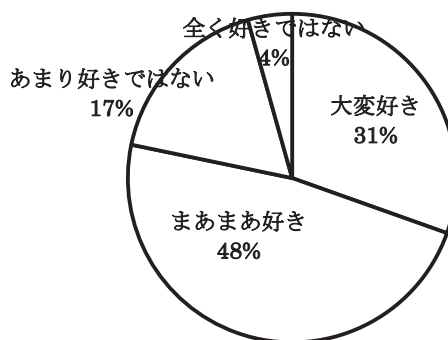
グラフ7 書くことが「好き」と推敲の段階で最も大切なことの相関



グラフ8 書くことが「好きでない」と推敲の段階で最も大切なことの相関



グラフ9 書くことの好き嫌いとは推敲の段階で最も大切なことで「キ」を選んだ割合の相関



とだと推察する。また、自分の書いた文章を読み返す習慣性は、高い割合で行われているということである。批評的な意味合いで、推敲を意識している児童の割合が高い（約6割）と多いが、姿勢や習慣性は非常に大切である。一方で、「自分が書きたいことが書けているか」という内容面に着目して推敲を行うと答えた児童が2割強いたことは予想外で驚いた。

このような推敲の意識調査から明らかになったことは、どんな観点で推敲するのかということ指導することで、「作文を見る目」というものは養われていくということである。本調査で、推敲する観点として意識が低かった「表現」については、第5学年及び第6学年での指導事項であり、今後の実践研究によって、児童の意識が変わるかどうかを追って見ていく必要があるだろう。そして、思考力や認識力を高める「推こう」については、目が向いていないというのが現状であることがわかった。それは、児童が自覚的に学んでいくことではないということである。

「推こう」することができるようになるには、どのような書くことの学習指導が必要なのか。それは、今後の研究において、倉澤栄吉と東京都青年国語研究会が行ったように「推こう」に焦点を当てた授業実践を行うこと、内田伸子のように「推こう」によってどのように書き手の「認識が変化したり、書く以前には自覚されなかったことが新たに発見されたり」していることを教師が分析できること、児童にそれを自覚させて自分の文章を書くような学習指導の在り方を探究していくことであると考えられる。

参考文献

- 1 内田伸子（1990）『子どもの文章 書くこと・考えること』 pp.219-220 東京大学出版会
- 2 倉澤栄吉・青年国語研究会編（1965）『作文の指導過程Ⅱ』 p.347 新光閣書店
- 3 同上（1966）『作文の指導過程Ⅲ』 p.347 新光閣書店
- 4 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領国語科解説』
- 5 倉澤栄吉・青年国語研究会編（1965）『作文の指導過程Ⅱ』 p.374 新光閣書店